

園の固定遊具における遊びのあらわれとその意味

村岡 眞澄

(幼児教育教室)

The phase of play with some large play instruments in kindergarten and its developmental meaning for children

Masumi MURAOKA

(Department of Childhood Education)

園における固定遊具での遊びの観察と保育者への聞き取り調査を行い、遊具に関わった身体体験の意味を主に幼児の心の発達との関連から追求した。その結果、観察された固定遊具での発散的・気晴らし的関わりから、修行にも似た自己超越的な関わりに到るまでの多様な体験は幼児の心の発達に不可欠ともいふべき重要な意味を有していることが明らかにされた。したがって、物的環境の視点からは、幼児一人ひとりの課題達成が容易となるような工夫や、遊具への能動性が高まるような遊具設置が望まれる。

保育者の指導・援助については、体験を客観化し、世界に意味づけを与えて、子どもが他者や自然、世界へと広がるようにするために、保育者自身が豊かな身体体験をもち、身体を通しての多様な楽しさ・喜びを子どもと共に分かち合えるような存在でなければならないことが示唆された。

キーワード：固定遊具 遊び 身体体験

<研究目的>

幼稚園や保育園の園庭には種々の固定遊具が配置され、幼児が遊具に関わりながら展開する遊び¹⁾や活動²⁾が保育の中で大きな位置を占めていることは周知の通りである。最近では、池や土手をつくるなどできるだけ自然を生かして固定遊具などはあまり置かないようにしたり³⁾、森の中に幼稚園をつくったり⁴⁾するところも出てきているが、概ね英国やドイツなどの緑一杯のまるで森の中にいるような感じを抱かせる自然環境に恵まれた幼稚園とは著しく様相を異にしているといえよう¹⁾。外国のこうした園でも、大型の遊具が全くないわけではなく、保育で必要な場合には移動式の遊具を設定するようになっていたりする¹⁾。

幼児体育に関連する文献にも鉄棒や鎖のジャングルジム、うんてい、登り綱などは取り上げられているが、公園に設置されている遊具に比較して種類も少なく、あまり工夫もなされていないように思われる。^{2) 3) 4)}

日本において、狭い園庭でも遊具が所狭しと並べられるようになった背景には、様々な要因が絡んだ歴史的経緯があると思われる⁵⁾。実際今日では、上述したように、固定遊具なしに保育の展開は考えられないといっても過言ではない程、かなりの時間を子ども達は固定遊具に費やしている。固定遊具遊びの中で様々な身体動作を経験することは、生活の中での活発な動きの減少が問題視されている今日、一定の意味をもっていると思われる。しかし、環境を通しての教育が重視される中で、遊具への自由な取り組みの中で、子ども達はどのような身体体験をしそれが幼児一人ひとりの成長・発達にとってどのような意味をもっているの

かについて、さらに色々な観点から追求し、保育者の指導援助のあり方を問うことは重要と考える。本研究では、こうした研究の一端として、事例研究法により、固定遊具での一人ひとりの幼児の身体体験がもつ意味を、主として心の発達との関連から明らかにしたい。

<研究方法>

1. 観察を中心とした事例研究

幼児が固定遊具に取り組んでいる場面を観察記録すると同時にビデオで撮影。活動の意味をとらえるため、主に子どもに変化がみられた場面を資料として使用。

2. 保育者からの聞き取り調査

活動の意味をとらえるために、観察日前後のこどもの姿について、担任の保育者から聞き取り調査をする。

3. 観察および聞き取り調査園

愛知県知立市立保育園3園、刈谷市立S幼稚園

4. 観察調査期間

1994年6月～1997年12月

<結果と考察>

1. 遊具そのものへの関わり

1) 遊具への挑戦から遊動(自己確認)

事例1 1994年 7月 3歳児

Y男はようやく乗れるようになったブランコに立ち乗りしてつかまっているが、不安定で動かすこともない。立っただけで満足そうである。

事例2 1994年 5月 3歳児

少しこわがっているA子に、保育者が「すべる？」と聞くと、B子と手をつないですべりに行く。みんなの後ろからすべったので「上手」と言うと、とても嬉しそう。

スイスイすべっている子には「ストップ」と言うと、脚を広げて止まる。他の子もやりたがり、「止まって」「すべって」を繰り返す。とても楽しそうである。

事例3 1995年 1月 3歳児

Y男は運動の経験が少ないので、手足は筋力がなくフニャフニャした感じで、なかなかやろうとしない。

保育者が「おいでよ」と声をかけると、他の子と同じように昇り始めたが、高い所がこわくて、手すりをギュッと握りしめ、足にも力を入れ躊躇している。

保育者「ここでちゃんと止めてあげるからおいで」

それを聞いてY男はゆっくりと降りてきた。「お名前は？」

と聞くと嬉しそうに答え、すべり降りてから「僕一人でやれた」と得意そう。

事例4 1994年 3歳児

<5月下旬>

Aは保育者と一緒にすべり台に行き、後ろの方に並ぶ。自分の番の時、ゆっくりと一歩づつ、慎重な足取りで昇っていく。すべる時も両手でしっかりとすべり台をつかみ、ズズズズーという感じでゆっくりと降りてくる。他の子は喜んで小走りに昇っては繰り返すすべっているが、Aは降りてきた所から少し離れ、じっと他の子を見てたずんでいる。

<6月中旬>

4歳男児がすべり台で遊んでいるのを、少し離れた所で見ている。3歳のM子がさっさと昇り他児の合間をぬってすべる。Aも昇ろうとするが、他児が来ると順番を譲ってしまう。他児がすべり台を離れると、M子とは反対側のすべり台の方をすべる。てすりをもつ力がだいが抜けて、少しすべるのが速くなっており、降りてからも小走りでのぼる。保育者が「Aちゃん、上手になったね」と声をかけるが、Aはまだ自分では納得していないようである。

<7月下旬から8月上旬>

色水遊びや砂遊びが多く、保育者に「食べてー」と言ってくるようになった。この頃から、4月にはこわがっていたブランコ乗って、「もっと押して」というようになる。まだ自分の脚ではこげないが、少しの間自分で揺れている。

<8月>

よくブランコに乗るようになり、どの保育者にも「押して」と頼み、振りを大きくすることを望むようになる。保育者は、押しながら「ホー、気持ちいいでしょう！」と声をかける。

<運動会后>

手をギュッと握って思いっきり走るようになり、かけっこが速くなった。走っている時、時々歯を出して笑うようになり、運動場面で緊張することが少なくなった。

事例5 1996年 1月 3歳児

4月から夏まで、Sは送ってくる祖母と別れられずしぶしぶ泣きをしていた。体が動かず、テラスにゴロンと転がっている。秋になると少し園にも慣れよく食べるようになった。

走るのは好きのようだが、なかなか友達の中に入れて、一人ポツンと座っていることが多い。運動会では、親や他の人が見ているので「がんばろう」という気持ちになったのか、とても元気に走ることができた。保育者は、どんな時もいつもやさしい言葉かけで接し、無理強いをせず、時におんぶにだっこ、そして手つなぎなどというように接し方を変えてきた。次第に元気に遊べるようになったが、ブランコや回転ジャングルなど動く遊具はあまり乗りたがらない。

1月になって、Sは他児が楽しそうにこいでいるのを毎日見ている、自分も乗ってみる気になった。立ちこぎをして、少しづつだが揺れが増しとても満足そうである。

筋力や技能をそれほど必要とせず、理屈抜きに知覚の変化に伴う身体感覚の楽しさを味わうことができるブランコ、すべり台、シーソー、回転ジャングルなど一般に「動く遊具」といわれている遊具に関わる遊びは、まさに遊びの原型⁵⁾を示しているといえよう。

事例1, 2, 3は入園当初のまだ遊具に慣れていない頃や、運動が苦手だったり、あまり興味を示さない子どもによくみられる姿である。このような子ども達も、事例にあるような保育者の温かい見守りを受ける中で、楽しそうに遊んでいる友だちの姿に誘惑され、保育者のタイミングのよい誘いや安心の言葉かけに応じて遊具に取り組むようになる。やがて遊具と折り合いがつけられるようになり、楽しさを味わうことで満足し自分に自信をもつことができる。子どもの変化は必ずしも短期間に起こるわけではなく、事例4, 5にもあるように自信をもつまでにかかなり長い時間の経過や保育者の支えが必要となることがある。

保育者との信頼関係ができることで、遊具に挑戦しようという気持ちが生まれてきたり、逆に遊具で動く楽しさを味わうことで、心が友だちや保育者などの他者に開かれていく、さらにブランコなどの遊具に乗れたという自信から、かけっこのような他の運動や仲間との遊びにも興味をもつようになる。このように、保育者と子どもとの信頼関係の構築や友だちとのコミュニケーション、活動意欲の形成に固定遊具での身体体験が深く関与していることが示唆される。

2. 遊具との一体化（気晴らし、発散、自己充実）

事例6 1995年 11月 4歳児

土曜日登園で、Y男は気分がゆったりしているようである。他児3人と楽しそうにブランコに乗っている。

Y男「め、め、めがまわる-----」

「めだまやき----- アハハ」

ブランコの板におなかの方を乗せて、かえるのりをしている。

事例7 1997年 10月 5歳児

M子とR子は、ジャングルジムの上で足を投げ出して座ったり、園庭を見回したり、一番上で腹ばいになったりしてい

る。保育者が「気持ちいい?」と尋ねると、2人共「気持ちいい」と答える。

事例8 1996年 11月 4歳児

4歳児のK男、R太が高さを調整できるブランコの方に来て、K男は自分で高さを変えて乗る。

2人で楽しそうに乗っている。

K男、前の方に上がる時背中を倒して空の方を見ながら

「天井まんまる、エイエイ!」という。

さらに勢いをつけて「ジャンプ、ラララ」

R太も「ロケット!」といい、ヒューーッと飛ぶ感じでこいでいる。

遊具を自由に乗りこなすことができるようになると、事例6のY男のように底板にお腹を乗せるいわゆる「かえる乗り」をして、身体の心地よさや感覚変化を楽しむ発散的な関わりや事例7のような気晴し的な関わり、他の事例にもあるように自己確認したりなどの様々な関わりがみられるようになる。4、5歳児に多くみられる姿である。事例8では、K男はブランコの高さを自分で変えている。この園では、子ども達が自分でブランコの高さを調整できるようになっている。このことで子ども達の自己認識と環境への能動的な関わりが生まれている。自分の力を認識し自己調整力を高めることは、有能感や安全能力の向上の基盤ともなる。その意味では、固定遊具とタイヤ、なわとといった遊具を組み合わせるなど⁶⁾、より発想を広げたり、能動性を引き出すような工夫が必要であろう。

事例8では、空に向かって飛び出すようなイメージで乗っている。ブランコでの飛翔には、日常から超え出たい子どもの思いがあらわされている⁷⁾、このように身体を通してまさに「日常的な生を超えて、新たな生、超越」に根源的に触れる⁸⁾ためには、軽やかに遊具と戯れることを可能にするだけの技能を身につけることができるような指導・援助が必要である。

3. 遊具への課題的関わり (自己克己・超越)

事例9 1995年 10月 4歳児

S夫は、ブランコはまだ横ゆすりしかできないが、うんていに対しては友だちがやっているのに刺激されて挑戦するようになった。女兒2名が加わった。S夫は1本目の棒は握れるが、2本目に手が届かない。保育者に「やって(体を支えて)」と催促する。保育者が体を支えると、手を伸ばして進もうとする。うんていに対しては驚く程の意欲を示し、5回も挑戦する。そのつど保育者に「やって」と催促する。

事例10 1996年 4月 5歳児

女兒のHが前回りを3回やってみせるのを見ていて、Sは「僕もやる」といって挑戦する。何回かとびついてやろうとするができない。保育者が「体もってあげようか」というと、

Sは「いい」と断わり、どうにかこうにか1回できて鉄棒の上で止まる。「ヤッター」といって喜ぶ。

保育者「できたね!」

S「うん」とうなづく。他児も自分のできる「ラッコ」「さる」と片脚かけてぶら下がり、保育者にみせる。

事例11 1996年 5月 5歳児

A子は前回りに挑戦するが頭を下げた状態で固まってしまう。横で4歳児が先生に手伝ってもらって前回りをしているのをじっと見ていて、再度やるができない。鉄棒より低いブランコの柵で挑戦ができない。

その様子を見て、保育者がA子が鉄棒にとびついた時、「手を回すんだよ」と声をかける。言われた通り手を先に回してかいくぐることができた。A子は嬉しそうに真っ赤になっている両手をひろげて見ていた。保育者はその手を包むようにする。

事例12 1996年 2月 4歳児

Nと2人で三輪車に乗って散歩ごっこをしていたS男は、うんていのところまでくると降りて、うんていにぶら下がった。Nも反対側から乗ってうんていの上に昇った。

Nの嬉しそうな声や姿を見て、S男も昇ろうとするがなかなか昇れず、近くにいた保育者に「どうやるの?」と助けを求めた。

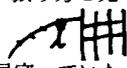
保育者「ここここに足をかけてね、グッと足に力を入れて、ヨイショと昇るんだよ」

S男は靴も靴下も脱いで、うんていの横棒に足をかけて昇ろうとする。

保育者がS男の体を支えると、なんとか上まで昇ることができた。満足した様子で、そろそろと自分で下に降り、また三輪車に乗る。

事例13 1996年 11月 5歳児

登園すると、U子は早くから来ていたM子とうんていをやりにいく。M子は「私やるから見ててね」と言ってやり始める。

U子は脇でM子の手運び、腰の振り方を見ている。U子は「私もできるよ」と言って、の方にいく。保育者は、危険がないように見守っていた。

片方の手を離して棒を握ると、もう片方の手が出る。両手が揃うと、また1つ前進する。1つずつ止まるが、かすかに腰を振り、いきおいをつけるように進む。

保育者「その調子!」 M子「すごいね。できる!」

1人で足の届く所までできた。降りると、手を見て、「豆がふくらむ」と、照れるように言う。

事例9～13のように、うんていや鉄棒などにおいては、自分で課題を設定しそれを達成しようと努力する自己克己・超越の姿が多くみられる。自分の力をよく知って、時には自分から保育者の援助を求めたり、

もう少しで達成できそうな時には「保育者の援助を断わる」「自分の足が届く方の遊具でやる」「倉庫から他の遊具を出してきてうんていの休憩地点にする」「手が真っ赤になったり、豆ができたりしてもやり通す」など幼児一人ひとりの取り組みに違いはあるものの、そこには自分なりに「できた」という自信と保育者や友だちに認められたいという承認の欲求、やり通したことの喜びがある。一本一本前に進んでいくうんていは、この時期の子どものそうした願いを具現化するのに適した遊具であるといえよう。遊具での身体技能の獲得は、保育者の指導によるものだけでなく、事例11や13のように、友だちのやるのを見て真似て、あるいは教わってというように子どもから子どもへという形で行われることが多い。専門の体育指導員に技能指導を依頼している園もあるが、できるに到るまでの一人ひとりの子どもの内面的成長に対する理解や保育者との信頼関係等々を考えれば、問題が残るところである。

事例14 1996年 5歳児

<6月5日>

T雄はいつもの仲間とうんていにぶら下がり楽しんでいる。そのうちUが進み渡っていくのに続いて、みんなも渡っていったが、T雄は思うように進めずすぐ落ちてしまった。

<6月7日>

T雄は仲間と一緒に砂場とうんていを交互にしながら遊んでいた。うんていでは一つ握ってはストンと落ちる感じである。一緒にいた友だちのUが一生懸命T雄の体を支え「Tちゃんガンバレ」という。その言葉に励まされてやる気を出していた。

<6月12日>

保育者は、うんていの下に机や椅子を置いてならべ休憩地点を作った。T雄はそれで目標ができたのか、5コ位ずつ進んでは、一休みという風にして続けることができた。保育者「すごいね。ピンク（5コ目の棒がピンク色をしている）までできちゃったね」T雄「もう一度やろう」と繰り返し続けた。

<6月19日>

砂場でままごとをして遊んでいたが、保育者がうんていの所にきたのを見て寄ってきて黙って得意そうにやってみせる。保育者「すごいじゃん。緑（20コ目の棒の色）までできちゃったね」

T雄はそれを聞いて、ニコニコと嬉しそうな表情をしながら砂場に戻り、遊びを続ける。

<6月25日>

T雄は「ねー見て見てやれるよ」といってうんていを全部わたった。体を揺すりながらリズムカルに渡ることができた。保育者が拍手をすると、とても嬉しそうだった。

友だちに支えられながら、20日間かけてT雄は、

うんていを渡りきった。保育者に認められたいという思いが原動力となっているが、うんていの渡り棒の色が違っていること、保育者が休憩地点をつくったことなどから、自分で少しづつ達成可能な目標を立てることができ、最後までやり通すことができた。T雄は頑張ってやり通すことの喜びを身体で感じとっている。5歳児になれば、自分から挑戦しようとしたことに対しては、先にも述べたように、友だちのやっているのを真似たり、練習したりなどの学びの姿が見られるようになる。友だちの存在が大きい、保育者の見守り、援助も欠かせない。

資料1のT代のように、3歳児からうんていに取組み、5歳で1本抜かしができるようになるまで3年にわたって挑戦しつづける子どももいる。その姿はまるで修行を思わせる程である。この子どもはできた時、「やればできるじゃん」と大きな声で言うが、これは、世界に意味を与え自分を形成する姿⁹⁾であり、意味や理解の身体性をよく示すものである。

事例15 1996年 6月 4歳児

5歳児男児のK、Mが楠の木の2m位の高さの二股の所で腰を下ろし、「オーイ、ヤッホー」と園庭で遊んでいる子に声をかける。

それを見て、一緒に遊んでいた4歳児のN子とT子が木の方に行ったので、U子も後から走ってついて行った。Mは軽く、T子は勢いをつけて登った。U子も太い幹を手のひらで探って足をかけて登ろうとするが滑る。

保育者「親指をけてね！」

親指をけると、両腕に力が入り、立ち上がった。右足を大腿まで高く引き上げて、二股（1m位）の所に手をつけて一気に登る。

前に登っていた2人の隣に腰を下ろし、

「涼しいね、いい眺めだね」と初めて笑顔で口を開く。

固定遊具ではないが、事例15のように、保育者の助言でやっと木に登ることができたU子は、苦勞を乗り越えて登り切ったという充実感の中で、これまでと違った風を、風景をいわば新しく開けた世界を感じ取っている。この時、あまり話すこともなく少し頑なだったU子の心は、柔らかく自然や友だちに向かって開かれている。木はジャングルジムよりも昇ることが難しいからこそ、達成感もまた大きい。やなかなかコツをつかめないでいる事例11や12の子ども、またU子のような子どもの場合、「ガンバレ」という励ましと同時に、「手を回して」「親指をけて」というような具体的で適切な助言が必要である。

II. 遊具の手段的利用

固定遊具に関わっては、この他にも、様々な遊びが展開されている。（資料2参照）

①鬼遊びのバリアー（障地）や牢屋やバスケットボールのバスケット代わりとして、他の遊びに取り込まれたり、②ブランコや回旋塔やうんていがままごとの家になったり、③ブランコで揺れながらお話しをするなど友達とのコミュニケーションの場に使われたりしている。また、④心が落ち着かなかったり、遊びが見つからないときの安息の場所であったり、⑤疲れたときの休憩所でもある。

<まとめ>

固定遊具そのものに関わる遊びのあらわれとその意味を考察してきた。ブランコやすべり台、うんていや鉄棒、ジャングルジムなどの自然の代替物である固定遊具での、発散的気晴し的な関わりから、修行にも似た自己超越的な関わりに広がる多様な意味の身体体験は、子どもの豊かな発達に不可欠なものといっても過言ではない。そういう意味では、狭くて自然環境の乏しい日本の幼稚園や保育園において、園庭の固定遊具は重要な役割を果たしていることがわかる。発達的な意味を考える視点からは、ブランコやすべり台などの遊戯的な関わりが可能な遊具と、うんていや鉄棒といった課題的な関わりが多い遊具のバランスのとれた設置が必要となろう。また、目標設定が容易になるように、一本一本色が違う渡り棒があるよううんていにしたり、運動が苦手な子どもでも恐怖感を感じないで挑戦できるように休憩地点を置いたり、たいこ橋のような遊具にするなど、一人ひとりの発達に応じて工夫しながら、どの子どもにも達成感を味わうことができるようにすることが大切である。高さの調整を自分で行うことができるブランコにするなど、遊具への能動性が高まるような選択、設置も大切である。

固定遊具での身体体験を意味あるものにするには、体験を客観化し、世界に意味づけを与えて、子どもが他者や自然、世界へと広がるように援助する保育者が不可欠である。そのためには、保育者自身が豊かな身体体験をもち、身体を通しての多様な楽しさ喜びを子どもと共に分かち合えるような存在でなければならない。

<資料>

資料1

T代の事例 3歳～5歳児の3年間の経過の概略

<3歳児 11月>

ジャングルジムの下でままごとを楽しんでいる。時々5歳児がやっているうんていをやろうとしているので、体を支えるようにしていたら、3本まで自分で渡れるようになった。

<4歳児 6月>

いとこのMに誘われて鉄棒に挑戦。保育者に支えられて前回りをする。

<12月>

T代は、一本ずつ右手から前へ進み左手をそろえまた前へ

と、身体を前後ろにゆらし勢いをつけ、顔は真剣だがその中にも自信を感じるようなすました顔でうんていをしている。

Y美「先生！見て見て！T代ちゃん、もうちょっとだよ」

その声を聞いてか、今まで以上に勢いをつけ早くなる。

保育者「ほんと、もうちょっとだね。すごい！あと3本。」

Y美「あと3本、3本。やったー」

保育者「最後までできたね、すごいね」

T代「やれできるじゃん」と、すました顔ではっきりと大きな声で言う。

T代笑って、まだできないR子に「やってみりん」と言う。

<5歳児 5月>

クラスのほとんどの女の子は手にまめをつくり、痛そうだが一生懸命うんていの1本抜かしに挑戦している。T代も一本抜かしが3本はできるが、その先がなかなかできない。再度挑戦、保育者がT代の身体を支え、勢いをつけてリズムカルにやれるように補助をした。T代満足そうにまた挑戦している。友達のY美はリズムカルにやってみせる。

T代「まだできない子もいるんだよね。」と内心悔しそうにひとり言のように言っている。他の女兒も「がんばってやれればできるようになるよね」と自分にいきかせるように言っている。

<6月>

T代「先生、私一本抜かしができるようになったよ、見て」と得意そう。

他の3人の女兒「先生T代ちゃんできるんだよ」と自分のことのように話していた。

T代の手は豆がつぶれて、練習の後がみられた。滑らないように手に砂をつけてやるなど、気力が表情に出ていて渡ることができた。

保育者「やったね」 T代はみんなに認めてもらい嬉しそう。保「どうしたらできるようになったの」 T代「家に帰ってから公園で練習してるもん」「それからね。手や脚をブラブラ揺ればできるようになるよ」

資料2

4歳児 10月

はしごやくさりのついた固定遊具をバリア<障地>にして、8人で鬼遊びをする。最初鬼は保育者で、子ども達はバリアの中にいる。2～3人が時々バリアから出て、「鬼さん、こちら」と保育者の鬼を誘っている。

5歳児 10月

ジャングルジムで遊んでいたC男が、遊具庫からボールを取り出して蹴りだすと、1人、2人とボールを追いかけて集まってくる。サッカーのように蹴ったり、投げたり、相手を持っているボールをたたいたりして取り合い、とてもにぎやかである。うんていの棒の間にボールが入り、下に落ちるのを受け取ると、おもしろくなってきた。

C男「バスケやろう」

ボールを取り合い、うんていの棒の間にボールを入れようと

する。

棒の間にボールが入ると「ヤッター」と喜ぶ。

5歳児 11月

5歳児のA子、B子、C子の3人でブランコに乗りにくるが、2つしかないののでC子はブランコのそばに置いてあったスケーターに乗って園庭を廻り始めた。

A子「今日どっかへ行きましょう」とB子に話しかけるが、やはりC子のことが気にかかっているのかB子は黙ったままで、C子を目で追っている。そこにC子が戻って来て、3人でスケーターに乗る。C子がやめてブランコに乗り、A子はブランコのそばで3歳児が遊ぶのを見ている。B子も来て3人で砂場のそばにあったままごとの道具をブランコの方に持ってくる。

A子「ね、ここレストランにしようよ」B子C子「いいよ」といながら、ブランコの周りの土を掘始める。3人はブランコに交代で腹ばいになって乗り、ユラユラ揺れながら土を掘っている。

5歳児 12月

男児2人がブランコに気持ちよさそうに乗っている。Y男は順番を待ちながら、2人に話しかける。

「今日来たサンタクロース、本物だと思う？」

A、B少しゆっくりと揺すりながら

A「本物だよ」

B「違うと思う。だってね、サンタクロースは夜来るんだよ」しばらく黙っている。

Y男「サンタクロースさ、そばに来たけどなんかくさかったよ」

A、Bそれを聞いて笑う。

Y男も嬉しそうに笑う。

5歳児 10月

活発な男児4人がブランコに乗り、ビュンビュン揺らしている。Y男「ジャングルへ行こう」

後の3人が連なるようにして、ジャングルジム、トンネル、サッカーゴールとまわっている。途中、お茶を飲んだり、座って休んだりしながら、またブランコに戻ってくる。

<註および引用文献>

註1) ここでの遊びは、そのこと自体が目的であるような自由な活動の意

註2) 他に明確な目的をもって行われる当番活動や生活のための活動としてとらえる。

いずれも、「村岡眞澄 保育の場での遊び、子どもの健康所収 三晃書房 1996」を参照のこと

註3) 例えば富山大学附属幼稚園

註4) 愛知県長久手町にある「もりのようちえん」

- 1) 村岡眞澄 英国における幼児の運動指導の内容と
その実際 愛知教育大学 幼児教育研究 No. 7
pp. 42-43 1998
- 2) P.Wetton, Physical Education in the Nursery
and Infant School, Croom Helm London &
Sydney 1988
- 3) L. Diem, Children Learn Physical Skills Vol2,
4 to 6 years, Kösel-Verlag GmbH & Co.,
Münich 1974
- 4) 村岡眞澄 幼児と運動遊び 「健康」の理論と実
践所収 中部日本教育文化会 P.66 1985
- 5) 森田弓恵 固定遊具の歴史と現状からその役割に
ついて考える 平成7年度卒業研究 1996
- 6) J. Smith Play Environments for Movement
Experience Charles C Thomas • Publisher
1980
- 7) 本田和子 子どもたちのいる宇宙 三省堂
1980 pp. 55-60
- 8) 矢野智司 子どもという思想 玉川大学出版部
1995 P. 74
- 9) 和田修二 子どもの人間学 第一法規 1982
pp.157-165